

●マグヌス・リンドベルイ (1958~)

## 『オットーニ』

金管アンサンブルのための (2005)

シベリウス音楽院在学中のマグヌス・リンドベルイ (1958~) は、当時のフィンランド音楽界に反旗を翻し、同時代の「モダン」を必死で渉獵した。かくしてグリゼイ、グロボカール、ドナトーニ、ファーニホウという錚々たる作曲家に師事したのち、その技術を吸収した青年が世界的なブレイクを果たしたことは周知のとおり。しかし、その刹那、次の課題が彼にふりかかってくる。ここからどう進めばよいのか…。一時期はハリウッドの映画音楽を書くことも考えたというリンドベルイは、しかし「シベリウスの『タピオラ』はまさにモダニストの作品だ」(1999年のインタビュー) という言葉に見られるように、やがて「モダン」の再定義を目指すようになる。この、才能に恵まれたゆえに困難な道程を、同時代の我々は見守らねばならないだろう。

2005年に作曲された『オットーニ』も、その過程で生み出された作品のひとつ。タイトルはイタリア語で金管楽器を指している。実にたわいない命名ではあるものの、12本の金管楽器によるこの楽曲が、どこかジョヴァンニ・ガブリエーリの『ピアノとフォルテのソナタ』を思い起こさせることを考えれば、そこにはひとつの意味が生じてこよう。過去から紡ぎだすモダンを、おそらく彼は探しているのに違いない。初演は2005年2月16日、クリフ・コルノット指揮シカゴ交響楽団のメンバーによる。

曲は冒頭、シーラーファ# という3音の主要モチーフを響かせて始まる。このモチーフは同音連打を交えな

がら、何層にも拡がって音の空間を形成。ほとんど付点リズムを含まない「機械的」な音価のあり方も、こうした造形を確固たるものとしている。半音下行のモチーフを経ると、ゆらめくような響きが支配する中間の緩徐部へ。やがていくつかの独奏がブリッジを形成したのちに、再び音楽は密度を取り戻し、ついに付点リズムがあらわれて終盤の訪れを告げる。クライマックスから曲尾にかけては、作曲者の高度なソルフェージュ能力が開陳された、めくるめくような展開。管楽器好きならば誰もが興奮するはずだ。

4 Hrn / 4 Trp / 3 Trb / Tub

初演：2005年2月16日 ハリス・ホール シカゴ  
クリフ・コルノット指揮 シカゴ交響楽団メンバー  
委嘱：エドワード・F.シュミット家委嘱基金

●マーク=アンソニー・ターネジ (1960~)

## 『デュエツティ・ダモーレ』

ヴァイオリンとチェロのための (2015)

マーク=アンソニー・ターネジ(1960~)は、マイルス・デイヴィスに傾倒し、レッド・ツェッペリンからビヨンセに至るポピュラー音楽を自作に取り込み、さらにはピーター・アースキン(ドラムス)のための協奏曲を書くといった、ジャンル越境的な姿勢で知られる作曲家。ただし彼の師のひとりが、ジャズとクラシックの融合を目指した「第三の潮流」の主唱者ガンサー・シュラーであることを忘れてはならない。型破りにも見えるターネジの活動は、ある意味では60年代の師の運動を、現代的な形で受け継ぐものなのだ。

近年のターネジは、プレイボーイ誌で活躍したモデルのス

キャンダラスな人生を描いた『アンナ・ニコル』(2011初演)の成功で知られるが、この『デュエット・ダモーレ』も、ややゴシップ的な背景を持った作品。というのも、美人ヴァイオリニストとして有名なニコラ・ベネデッティと、チェリストのレオナルト・エルシェンブロイヒの恋愛がベースになっているというのだから(この二人の恋愛はイギリスの音楽界では相当に話題になったらしい)。二人からヴァイオリンとチェロのデュオを依頼されたターネジは、「5つの愛の風景」として、この曲を完成させた。初演は2015年9月17日、先の二人による。

曲は5つの部分からなり、いずれもが男女の対話を構成する。まず「デュエット1」は、流れるような旋律で始まり、交互に伴奏を担当する仲睦まじい風景。一方、弱音器付きで奏される「デュエット2」は、お互いに反行音型で始まる愛のかたち。「デュエット3」は間奏曲と題されており、スタッカートとピッツィカートがはじける活発な音楽。「デュエット4」は夜の語らいなのだろう、もっとも抒情的な一幕。そしてブルースという副題が付けられた最後の「デュエット5」は、二人の喧嘩が強烈に描かれ、しかし最後にはより深い結びつき(?)が仄めかされて曲を閉じる。

なお、蛇足ながら、この初演のあと2017年にニコラとレオナルトは破局を迎えた。

初演：2015年9月17日 コンサートホール パース(イギリス)  
ニコラ・ベネデッティ(ヴァイオリン)、レオナルト・エルシェンブロイヒ(チェロ)  
委嘱：レオナルト・エルシェンブロイヒ(チェロ)

◎ヴォルフガング・リーム (1952~)

## 『ビルトニス：アナクレオン』

テノール、ピアノ、ハープ、クラリネット、チェロのための (2004)

現代ドイツを代表する作曲家のひとりヴォルフガング・リーム(1952~)は、日本ではいまひとつ人気が高いようにも思われる。その音楽の独特な雄弁さが、時に一種の押しつけがましさを感じさせるからかもしれないし、あるいは作品に仕掛けられた文学的・歴史的な重層性を読み解くためには、前提としての「ヨーロッパ的教養」が必要という事情もあるのかもしれない。しかしいづれにしても、だからこそ我々はリームについてさらに知らねばならないだろう。

タイトルは「肖像：アナクレオン」といった意(ちなみに今回の室内楽プログラムの作品タイトルは主催者の意向で原語のカタカナ読みに統一されている)。10分に満たないものの、作曲者らしいくらみに満ちた作品である。テキストは、詩人のエドゥアルト・メーリケによる『アナクレオン、そしていわゆるアナクレオン歌曲』(1864)という書物(現在、インターネット・アーカイブというサイトでこの全文が閲覧可能)から選ばれた詩および断片。アナクレオンは紀元前5世紀に活躍した抒情詩人で、当時、その詩は豎琴にのせて歌われたと伝えられている。リーム作品におけるハープを含んだ編成は、当然ながらこれを意識してのものである。かくして、ここでは古代ギリシャのアナクレオン、19世紀のメーリケ、さらには21世紀の現在を生きるリームという三層が重なり合うことになる。2004年にフーゴー・ヴォルフ協会ほかの委嘱で作曲され、同年5月16日、ハルトムート・ヘルほかによって初演された。

作品は、きわめて短い10曲からなる。まず第1曲「答え」では、アナクレオンと、彼を年寄だとさげすむ女の子の対話が描かれ

る。抑制された楽器法、そして調性のはざまでゆるる音の層が形成する奇妙なアイロニー。続く第2曲～第9曲は俳句のような断片がゆるやかに繋げられて奏される。いずれも10小節～20小節というミニアチュール的な作りだが、時として断ち切るような響きが、音色の妙味を際立たせていよう。そして「申しひらき」と題された第10曲では、宇宙的な詩が「優しく揺れるテンポで」と記された音楽と静かに溶け合う中で、はるかな古代ギリシャのエコーが響いてくる。

初演：2004年5月16日 リーダーハレ シュトゥットガルト  
マルクス・シェーファー(テノール)、ハルトムート・ヘル(ピアノ)、  
マリア・シュタンゲ(ハープ)、ゼバスティアン・キュルツル(クラリネット)、  
ペーター・ティリング(チェロ)  
委嘱：国際フーゴ・ヴォルフ・アカデミー  
ドイツ文学資料館(協賛：ヴェルテンブルク抵当銀行芸術科学財団)

●細川俊夫 (1955～)

## 『悲しみの河』

リコーダーと弦楽アンサンブルのための (2016)

『細川俊夫 音楽を語る』(アルテスパブリッシング)の中で、W. W. シュパーラーは細川俊夫(1955～)を旅人にたとえた上で、「旅人は、私たちが知るように憂愁の人(メランコリカー)でもある」と述べている。なるほど、この作曲家について考えるときに、旅と憂愁という概念はきわめて有効だ。実際、日本人としては前人未到というほかない成功をヨーロッパで収めた細川は、しかし、だからと言ってさして嬉しそうにも見えない。逆に、成功が深まるにつれて、その口調には憂いが、メランコリーがより強く感じられるようにも思うのだ。憂いを帯びながら世界をさすらう作曲家——おそらくここに、シューベルトという稀有な存在

との共振関係が潜んでいる。とすれば、細川の音楽は、一般的に考えられているように「日本的」というよりは、むしろロマン派的な何ものかを強く包含しているはずなのである。

リコーダーと弦楽器のための『悲しみの河』は、細川の近年の作品に多くみられる「水・河」をめぐる連作のひとつ。作品はリコーダー奏者のイエレミアス・シュヴァルツァーに献呈されており、2016年6月14日、彼の独奏と作曲者指揮のアンサンブル・レゾナンツによって初演された。

曲は空気を微かに震わせるようなリコーダー独奏から始まる。やがて加わる弦楽器はソーラ-シb-ミという和音をクレシェンドとデクレシェンドの交替で、あたかも呼吸のように繰り返し、時として上下行するトレモロでざわめく。このトレモロ群が、細川作品としては稀なほどに破滅的な響きへ成長すると、楽曲は後半部に突入。ゆったりとグリッサンドを繰り返す弦楽器群は、やがて弓を弦に強く押し付けることによってノイズを発生させ、ほとんど電子音楽的な音響空間を形成する。この上でたゆたう独奏は、重音奏法を駆使した長いカデンツァに到達。終盤はさらに夢幻的な世界が展開され、弦楽器の反復音型が歪んだ形でリコーダーへと転写されて、しずかに幕を閉じる。

Recorder (Soprano, Tenor, Bass) Solo – Strings (3-3-3-2-1)

初演：2016年6月14日 ライスハレ 大ホール ハンブルク  
イエレミアス・シュヴァルツァー(リコーダー)  
細川俊夫指揮 アンサンブル・レゾナンツ  
委嘱：ノルトライン=ヴェストファーレン州芸術財団

●サルヴァトーレ・シャリーノ (1947~)

## 『ジェズアルド・センツァ・パローレ』

アンサンブルのための (2013)

さまざまな特殊奏法を駆使した亡霊のような音響がトレードマークとなっているサルヴァトーレ・シャリーノ(1947~)だが、彼は一方で、ルネサンス音楽からモーツァルトに至る様々な作品を「編曲」しながら、常に創造と再創造の関係について考えてきた。本作で彼が俎上にあげるのはカルロ・ジェズアルド(1566~1613)。不貞を働いた妻(とその愛人)を惨殺した人物として有名だが、同時にルネサンス期にあって半音階や不規則なリズムを駆使した特異な作風で知られる作曲家である。ジェズアルド没後400年にあたる2013年、シャリーノは彼のマドリガーレ集から4曲を選び、器楽アンサンブルに仕立て上げた。タイトルはもちろん、歌詞(言葉)のないジェズアルド、の意である。

初めて聴く人はやや拍子抜けするはずだ。というのも、原曲の楽譜と見比べてみると分かるのだが、この曲でシャリーノは、もとは4声のパートを拡大し、さらには音の重なりをずらすことこそ行なっているものの、ほとんど新しい音高を付加していない。おそらく彼の目論見は、自分の音楽世界を展開することよりも、原曲に微妙な歪みを加えて、少しだけ異なった視点から眺めてみることにある。初演は2013年12月10日、アンサンブル・ルシェルシュによる。

第1曲(原曲は『マドリガーレ集』第3巻「私はあなたを愛していない」)は、全体がゆるやかに引き延ばされてはいるものの、きわめて真っ当な「編曲」。第2曲(原曲は第4巻「主の顔は死に覆われている」)では、タムタムの響き、奇妙なグリッサンドが、わずかに現代風の味わいを醸し出す。フルートとクラリネットの対話に始まる第3曲(原曲は第6巻「もしもお前が私の死を望むな

ら」)は、オーボエとチェロの響きがむしろバロック風の味わいを醸し出す。そして第4曲(原曲は第6巻「美しい人よ、あなたがいないければ」)の冒頭で、ついに「現代音楽」らしい響きが登場。実は原曲はジェズアルドの作品の中でもとりわけ不穏な半音階や対斜に満ちた異様な音楽であり、おそらくはこの部分を拡大敷衍したということなのだろう。それでも後半はルネサンス音楽へと戻り、奇妙な輝かしさを放ちつつ曲を閉じる。

Fl (A-Fl / Bs-Fl) / Ob (E-Hrn) / Cl (Bs-Cl) – Perc (Tubular Bells / Mar / 4 Chinese Cym / Hi-Hat / Tam-Tam / Bass Drum) – Vn / Va / Vc

初演：2013年12月10日 モラート・インスティトゥート フライブルク  
アンサンブル・ルシェルシュ  
献呈：アンサンブル・ルシェルシュ

**Bildnis: Anakreon**

1. „Antwort“

Es sagen mir die Mädchen:  
Anakreon, du alterst.  
Den Spiegel nimm und sieh,  
Du hast das Haar verloren;  
Ganz kahl ist deine Stirne.  
- Ob ich noch Haare habe,  
Ob sie mir ausgegangen,  
Ich weiß es nicht; doch weiß ich,  
Daß holde Lust und Lachen,  
je näher kommt das Ende,  
So mehr den Alten ziemet.

(Anakreonitische Lieder, 24)

2.

Ich lieb, und liebe doch auch nicht,  
Verrückt bin ich, und nicht verrückt.

(Fragment 33)

3.

Wer doch, der auf so liebliche  
Jugend richtet den Sinn, tanzte wohl noch gern nach der armen Flöte?

(Fragment 9)

4.

Daß ich sterben dürfte! Sonst ist ja doch nicht Rat  
Noch Erlösung aus dem Drangsal für mich mehr da.

(Fragment 21)

5.

Ich hasse alle  
Jene versteckten Gemüter, die so unhold  
Sind und so schwierig; in dir, Megistes, fand ich  
Eines der kindlichen Herzen.

(Fragment 28)

『ビルトニス:アナクレオン』(肖像:アナクレオン)

1. 「答え」

若い女たちが言う  
アナクレオンよ、年老いた  
鏡を見てごらん  
頭に毛はない  
額に毛はない  
— 毛がまだあるか  
抜けきったか、知ったことではない  
腑におちるのは  
愉しく笑っていれば  
命が終りに近づくほど、よけい  
老いた心がやすらくこと

(「アナクレオンの歌」24)

2.

恋している、それでまた恋はしてない  
心ここにあらず、だが狂ってはいない

(断片33)

3.

さはさりながら、すてきな若さを欲する者が、かつて  
ひどい笛の音にあわせ、踊ろうとしたことがあるか?

(断片9)

4.

死ぬるなんて! さもなくば、なにしろ、もはやおれには  
いざごさからの救済はない、わざわいを逃れる名案はない

(断片21)

5.

本心を見せない者はみな  
嫌でたまらない、悪意をふくみ、付き合いづらい  
メギステスよ、おまえのうちには  
天真爛漫な心根が見えた

(断片28)

6.  
Stets ist des Eros Würfelspiel rasender Wahn und Kriegslärm nur.  
(Fragment 18)

7.  
Wie mit Machtstreichen der Schmied, so hämmert' erst mich Eros,  
Und im Wildbache nun schreckt er grausend kalt die Glut mir.  
(Fragment 19)

8.  
Ich lieb, und liebe doch auch nicht,  
Verrückt bin ich, und nicht verrückt.  
(Fragment 33)

9.  
Zum Weintrinker gemacht bin ich.  
(Fragment 40)

10. „Rechtfertigung“  
Die schwarze Erde trinket;  
So trinken sie die Bäume;  
Es trinkt das Meer die Ströme;  
Die Sonne trinkt die Meere;  
Der Mond sogar die Sonne:  
Was wollt ihr doch, o Freunde,  
Das Trinken mir verbieten?  
(Anakreonitische Lieder, 23)

Textzusammenstellung vom Komponisten.  
Aus: Eduard Mörike: *Sämtliche Werke*, Band II, Düsseldorf; Zürich 1996, S. 830ff.

6.  
エロースの骰子博奕さいころばくちはつねながら、激しい狂気、戦さの騒ぎにほかならず  
(断片18)

7.  
鍛冶屋が力で鍛えるとひとしく、おれを鍛錬したのは、なにをさておきエロース  
熱く燃えあがる炎を、氷らんばかりの流れに差しこむ  
(断片19)

8.  
恋している、それでまた恋していない  
心ここにあらず、だが狂ってはいない  
(断片33)

9.  
酒呑みに、わたしはなってしまった  
(断片40)

10. 「申しひらき」  
黒い大地は呑む  
大地を樹々が呑む  
いくつもの河を海が呑む  
いくつもの海を太陽が呑む  
その太陽をすら月が呑む  
おお、友らよ、なにゆえ  
わたしが呑むのを禁ずるか  
(「アナクレオンの歌」23)

テキスト構成は作曲者による。  
出典:エドゥアルト・モーリケ『全集』第二巻、830頁以降(デュッセルドルフ、チューリッヒ、1996)

訳: 檜山哲彦